

緊急開催 ～ジルヴェスター・ポップス・コンサートによせて～  
薄井憲二バレエ・コレクション常設展

vol. 52

## ソノ・オーサト —On the Town—

展示期間 /  
2015年12月26日(土)～2016年1月13日(水)

企画・構成 /  
関典子 (薄井憲二バレエ・コレクション・キュレーター)

### ジルヴェスター・ポップス・コンサートによせて

2015年、芸術文化センター開館10周年のグランドフィナーレを飾るジルヴェスター・ポップス・コンサート。そこで演奏されるミュージカル『オン・ザ・タウン』に因み、1944年の初演に主演した日系人ダンサー、ソノ・オーサトの資料を展示いたします。

1944年暮れ、ブロードウェイは新作の成功に沸き立っていました。作曲レナード・バーンスタイン、振付ジェローム・ロビンスら20代の俊英たちが創り上げた『オン・ザ・タウン』(のちに映画化、邦題『踊る大紐育』)こそは、ミュージカル黄金時代を拓いた画期的な作品です。このとき、輝くばかりの魅力で観客を熱狂させたのが、主演のソノ・オーサトでした。日米戦争さなかのアメリカで、小柄なソノがミュージカル・スターとして一世を風靡することになったのです。

20世紀バレエの最先端でセルゲイ・ディアギレフの遺産を十全に受け継いで育ち、アメリカのショー・ビジネス界を喝采を浴びながら駆け抜けた、日系人ダンサーの魅力をご堪能ください。

ソノ・オーサト——1930年代半ばから50年代にかけて世界的に活躍したこの踊り手の名を知る人は少ないだろう。1922年にアンナ・パヴロワが訪日して以来、ほかにバレエらしいバレエを見られなかった戦前の日本にあって、伝え聞くバレエ・リュス・ド・モンテカルロの輝かしい活動も、そこにひとり日本人の踊り手がいることも、まったく夢のようなできごとと思えた。こちらでは、バレエとはどういうものか手さぐりで模索している状態だったのに、混血とはいえ日本人が檯舞台で踊っているのだ。ダニロワ、トゥマノワといった世界のバレリーナに伍して堂々と踊るソノ・オーサトの存在に、われわれ戦前からバレエに関わっていたものはどれだけ勇気づけられたかわからない。

(ソノ・オーサト『踊る大紐育～ある日系人ダンサーの生涯～』)

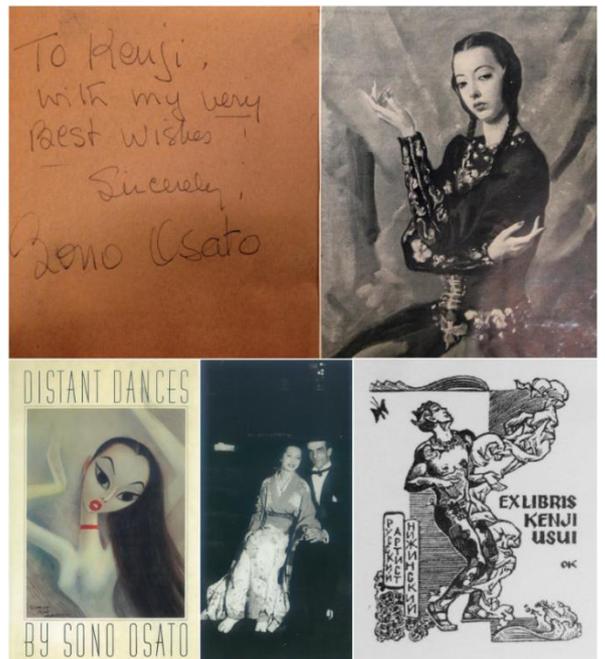
薄井憲二訳 晶文社 1995年 362頁 訳者あとがき)

### ソノ・オーサト (Sono Osato 1919～)

日系アメリカ人ダンサー、女優。父は日本人、母はアイルランド＝フランス系カナダ人。アドルフ・ボルム、その弟子ベレニス・ホームズに師事した後、1934年、14歳でバジル大佐のバレエ・リュス・ド・モンテカルロに入団、1936～40年プリンシパル・ダンサーを務め、ミハイル・フォーキン、レオニード・マシーン、プロニスラ・ヴァニジンスカの作品で踊る。1938年、『放蕩息子』(振付ダヴィッド・リシーン)で初主演。1941～43年にはバレエ・シアターで踊り、アントニー・チューダーの『火の柱』初演(1942)に出演。1943年ミュージカル『ヴィーナスのワン・タッチ』(音楽クルト・ヴァイル、演出エリア・カザン、振付デ・ミル)初演、1944年『オン・ザ・タウン』(音楽レナード・バーンスタイン、振付ジェローム・ロビンス)初演に出演、ブロードウェイ・スターとなる。1948年映画『キスする盗賊』、1950年芝居『ペール・ギュント』に出演するが、1955年に引退。著書に自伝『踊る大紐育(Distant Dances)』(1980)がある。2016年1月には、アメリカの舞踊団ソドス・ダンス・シカゴによって、彼女の生涯をテーマにした『ソノの旅(Sono's Journey)』初演が予定されている。

### 主な出展リスト

- ◆書籍『Distant Dances』(アメリカ 1980年 / 翻訳『踊る大紐育～ある日系人ダンサーの生涯～』薄井憲二訳 晶文社 1995年)
- ◆写真 大晦日、レオニード・マシーンと共に(アメリカ・シカゴ 1934～1935年)
- ◆写真 バレエ・リュス・ド・モンテカルロ時代(1936年)
- ◆薄井憲二氏への直筆メッセージ・署名・写真(1930年頃)



兵庫県立芸術文化センター

〒663-8204 兵庫県西宮市高松町 2-22

tel: 0798-68-0223 fax: 0798-68-0212

※ 禁無断転載・複製・引用